
境界線上の幻想郷

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の幻想郷

【Nコード】

N7538Y

【作者名】

葛根

【あらすじ】

たぶんハーレムになると思います。

時空系列など気にしたら負け。

基本的に軽いノリで読んでいただけると助かります。

なお、原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第一章 境界線内の幻想達（前書き）

独自の解釈やキャラ崩壊がありますのでそれらが気になる方にはオススメしないです。

それでもいいよって方で、読んでもいいよって思っていただける人は続きをどうぞ。

第一章 境界線内の幻想達

霧雨魔理沙とパチュリー・ノーレッジの間に男がいる。

紅魔館の図書館、その一角にテーブルや椅子があり、さらにはソファーや簡易ベッドまである。

何故、二人の間に男がいるかという疑問に答えるなら、二人に取ってその男は必要な人間だからだ。

「所でツムグ、まだ、霊夢の神社に居候してるの？」

「そうだぜ。人里で家を借りる。いや、香霖堂に世話になれよ」

何度かこのやり取りはしたことがある。

しかし、答えはいつも同じで

「霊夢は放っておくと碌な食生活しないし、怠けるし、腋だしてるし。ま、放って置けない駄目娘^{だめこ}なんだよ」

博麗霊夢は自堕落な駄目巫女だ。

幻想郷において重要な役割を果たしているはずなのだが、本人はあまり判っていない様子である。

異変が起きている時の勘の良さと働きっぷりの一割でもいいから平時の時に分けると言いたい。

だから、変態八雲紫に馬鹿にされるのだ。

「放って置けないってなあ。アレはもう直らないんだぜ？」

「ひどい事いうなよ。月に一回位は神事だつて、やるようになったんだ」

以前は思いつきでやる程度の神事を月一に行うまでに改善した。

とはいえ、人里にふらりと訪れて占い屋みたいなことをすることもあれば、悩み相談を聞いたり、妖怪の話を聞いたりする曖昧な仕事だ。

実際、神事に関わる^{みそぎ}禊やお祓いは幻想郷においてあまり重要ではなかったりする。

なにせ人間と妖怪が共存しているのだ。

宴会を神事に含めるのなら割りと働いている事になる。

大宴会などは異変解決後に行うし、毎日妖怪の誰かが博麗霊夢の食事、というか俺の料理を食べに来るのだが、それを神事と言っているのだろうか？

頻度が高いのが亡霊である西行寺幽幽子なので、神事のお祓いに当たる仕事だといえは言い訳になるのだろう。
食うだけ食って帰るし。

「え？ あの霊夢が？ そんなバカな？！」

パチュリーが驚愕している。そんなに驚かなくても。

いや、駄目巫女の噂は既に殆どの妖怪や能力持ちの者に伝わりきっている。

俺は何人にも同じような話をしたが信じられないという顔をする奴らばかりだ。

敵は多いぞ、霊夢よ。

と、思い出す。紅魔館の図書館に来たのはパチュリーに呼ばれたからである。

この幻想郷の癖のある奴らと話すとどうも脱線する。

「ところでなんで俺を呼びつけた？」

「え？ああ、貴方の能力が必要だからよ」

「そうだけ。これから、魔法研究というなの実験をやるからな。ツムグの【力を分け与える程度の能力】があると助かるんだぜ？」

要はタンクになれということか。

はいはい、どうせ、俺には戦う能力がないですよ。なにせ、能力が力の供給だ。魔法タンクとか、霊力タンクとか呼ばれてますよ！こいつらには内緒だが、守矢の神社の奴らに執拗に付け狙われているんだぞ。

諏訪子と神奈子にも力を、神力を与えられるとバレてしまっているからな。

二人とも全裸耐性が付いており、厄介だ。

東風谷早苗には耐性は付いておらず、久々に初々しい反応を見た。幻想郷において全裸ネタを通じる人物は少ない。

俺の心のオアシス！東風谷早苗！

霊夢然り、魔理沙、パチュリーに全裸ネタをしたことがある。

股間の部分は魔力と霊力でばかりの入れた状態だったが、三人とも冷めた反応であった。

霊夢は

『で？ 昼食なに？』

だったし、パチュリーは

『ああ、魔力と霊力の複合技術ね？ 全く無駄な技術ね』

と分析するし。

魔理沙は

『？ 死ねよ？』

だった。

意外にも、風見幽香が乙女だった。

あの時の恥らう顔とマスタースパークの威力は忘れることはないだろう。

半死の全裸状態の俺を拾って博麗神社まで届けてくれた射命丸文には文々。新聞購読という行為で現在進行形でお礼を返している。

適当に魔力供給して、俺には理解のできない魔法実験を行い満足気に二人して俺に微笑んだ。それをお礼と受け取り帰宅することにした。

魔理沙は泥棒稼業から足を洗ったらしい。

一時期、俺が紅魔館でレミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットの面倒を見るというバイトをしていた時期にパチュリィに頼まれて魔理沙を挟撃した。

その後、話し合いの結果、紅魔館図書館でパチュリィと魔法を研究、技術協力したほうが、効率よくね？ということとで落ち着いた。パチュリィの愉悦した笑みは触れてはいけないと思った。

フランドール・スカーレットに対しては少々、というか、狂っていたので常識力とか知力とか認識力とかコミュ力などをバランスよく供給することにより、“普通”を学習させていたのが功を奏して今では姉妹揃って時たま出かけるまでになっている。

十六夜咲夜はこの事に関し、

『私の萌え成分が増えたことに感謝します』

など戯言を述べていたので、常識力を供給しておいた。

もちろん、変化などなかった。ロリコンであり、変態紳士であってそれが彼女の常識なんだろう。

紅美鈴の乳とパンツを見に用事もないのに度々紅魔館に訪れる俺もどこか常識というものが欠けているのだろうか？

いや、紅美鈴が居眠りの最中に服を多少ズラしたりめくったりする程度では起きないのが悪いのだ。

最中に目覚められるとお話と言う名の肉体言語を用いてくるのでその時は逃げるに限る。

俺の奇襲が何度か会った後、彼女はついに居眠りをしなくなってしまった。

そうではない。俺の発する気を覚えて、俺の気が近づいた時のみ起きるようになったのだ。

『来ましたねー？私、寝てませんよ？ええ、貴方の気は覚ええましたからね』

俺だけに反応しているのは駄目だと思う。

「あら？ もう帰るの？」

レミリア・スカーレットだ。

毎回思うが、500年以上生きているとは思えない。

美少女であるが、『私、レミリア・スカーレット。小学5年生』と言ってもまるで違和感がないと思う。

実際、その位の年齢に見えるし、10歳と言われても信じるだろう。初めて会った時のカリスマ性はどこかに行ってしまったようだ。レミリアにも全裸ネタは通じなかったな。

初対面で全裸ネタやったのに

『ふっ』

と微笑を浮かべて弾幕撃ってきたっけ。

「夕食を作らないとウチの駄目巫女が怒るからな」

「まだ、霊夢んとこにいるのね。父親？　というのは失礼ね、面倒見のいいお兄さんと言った所かしら。お兄さんと言えば、フランがお兄ちゃんが欲しいと言っていたわね。そうね。貴方、フランの兄ね。あら？　そうなると私の兄にもなるのかしら？　それとも弟かしらね？　霊夢達と年も近いし、やはり弟ね」

また、勝手に話を進めて決定しやがる。

「フランも確実に俺より年上だが？」

「いいのよ。フランが兄と思うなら兄で」

妹が全てに優先されるルールらしい。

「それより、他人行儀な喋り方はよしなさい。私達は兄妹なのよ？」

「兄妹は決定なんだな？！」

スカーレット姉妹は家族愛に餓えているのだろう。

友達は最近増えているみたいだが、家族に見せる素の自分というものを模索していると予測。

咲夜は姉と振舞っているが、まだまだ、足りないであろう。

甘えたい年頃というには随分な年数を積み重ねているが、容姿的には親に甘えている年頃だ。

「はあ、好きにしる。明日、博麗神社に遊びに来るといい」

「そうね、フランと私、咲夜とパチュと美鈴で行くわ。またね。お兄さま？」

カリスマを気取っているなあ。

抱っこしてお別れの挨拶をして紅魔館を出た。

「お帰りですねー？ では！」

「おう、じゃあの」

美鈴は俺を客として扱わないので気軽にいい。
門から数歩の所で飛んで帰った。

第一章 境界線内の幻想達（後書き）

東方MMD射命丸 文の白玉楼突撃取材など見たら書きたくなくて書きました。

第二章 食事場のジャイアニズム（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第二章 食事場のジャイアニズム

伊吹萃香がいた。

博麗神社、霊夢の自室に当たる部屋に勝手に入り込んで既にアルコールを飲んでいた。

霊夢はこの時間夕食の材料を人里に買いに行っているはずである。よって、今、この瞬間、この場合、霊夢の部屋にいるということは不法侵入したということだ。

「おうゝ、摘みは？」

「ねえよ」

「えゝ、摘みい、摘みい！」

ガシガシと腕を左右に振られる。

力を加減されているが、こちらが摘みを出すというまでは絶対に離さない気だ。

この美少女もまた、妖怪である。

怪力の持ち主で、俺の腕を握り潰す事くらい簡単にやってのける。腕を握り潰してしまったら摘みが作れないから握り潰さないのか、それとも実力者として認められているのか。

まあ、前者だ。

しょうがねえなあ、と前置きし、

「干し柿と漬物で我慢しろよ？ 夕食は食っていくのか？」

「わーい。食う」

アルコールの入った瓢箪と頭に生えている二本の角がなければ子供に見えるだろうな。

餌付けされた鬼は手間が掛かる。

しかし、萃香には博麗神社の地酒、”博麗酒”の元になる酒虫のエキスを分けてもらった恩がある。

エキスを塗った瓢箪から創りだされる酒を100倍ほど薄めることで人間でも飲めるアルコール度数になっている。

ただの水から酒ができるので儲かる。

何せ何年も寝かした酒より博麗酒の方が、うまいし安いのだ。

萃香は薄めるなんてトンデモナイなど言っていたが鬼と人間ではアルコール耐性が違う。

「ふおういへば……、んぐ、ぷはあ。そういえば、守矢神社とこの早苗がフラッとココに来てツムグさんいませんか？　って聞かれたからいせんよって答えたら帰っていったぞ？　アレは何だったんだろうなあ？」

「なあに、気にするな。ダダの常識に囚われていない痛い少女だ」

ついに本陣まで侵入してきたか！　信仰の代行者め！

霊夢不在の隙を狙っていたのか、天然で現れて奇跡的に霊夢が不在だったのかわからないが、前者なら行動パターンをどこかで監視していることになり、後者なら能力だ。

信仰の代行者。

守矢神社の住人で、現人神だ。

奇跡を起こす程度の能力の持ち主である。

自信に満ち溢れた行動力と天然が売り。なお、オパイはボイン。

「なんだあ？　その憐れみの目は？」

「これが持たざる者が……」

薄いな。

霊夢は慎ましやかに並。

メイド長も並。

PAD疑惑は俺が命を賭けた乳揉で解決した。

あの時は、うん。レミリアに救われたが、大きな代償を払ったな。

紅魔館の掃除だったり、メイド長に長期休暇を与える代わりに俺が代行してメイドの仕事をした。

その時に戦利品として各自の下着を手に入れたが、香霖堂を経て闇市場で高値がついた。

森近霖之助が本物であると鑑定書までつけて売りさばき、売上の7割ほど持っていていかれた。

紅魔館の七不思議の一つ”消える下着事件”の犯人は主犯、俺。共犯、霖之助だ。

事件は迷宮入りしたが、もう二度と同じことがないように、厳重な防壁を作られた。

そんな事を思い出しながら萃香と適当に話をしていたら、家の主が帰ってきた。

「あれ？ 萃香も来てたんだ」

博麗霊夢の横には、四季のフラスターマスターの二つ名を持つ人物。

風見幽香がいた。

彼女は伊吹萃香と同じく気まぐれで博麗神社に遊びに来る。

霊夢とお茶を飲んでいるのを見かける事が多い。

お茶会のようなものである。お茶会のある日は必ず夕飯まで一緒に食べて、宿泊していくのだ。

何故か、霊夢と幽香と一緒に風呂まで入るが理由は聞かない。同性同士なのだから別に問題ないのである。

萃香と幽香。似た名前であり、お互いに顔見知りになり、今では仲も良い。妖怪同士何か通じるものがあるのだろう。

幽香は萃香を妹のように可愛がる節がある。萃香も別に嫌がりはず、されるがまだ。

実の所、昔、二人はガチバトルしたことがあるらしい。

その後、しばらくお互いに干渉だったが、霊夢が現れ、二人共、霊夢に倒された。

そして、博麗神社に再戦として乗り込んできた時に萃香と幽香が鉢合わせになり、その時に色々なやり取りがあり、今に至る。

風見幽香には痛い目に合わされたことがある。

一度目は初対面で全裸で遭遇した時だ。

あの時俺は幻想郷を隅々まで冒険するという生活をしており、大体の妖怪には全裸で対応していた。

当時の服は俺の意思でパージ可能な特別な服で一瞬にして全裸になれるという機能が付いていた。

しかし、幽香にソレを見せた際に俺ごと、マスタースパークで吹き飛ばされてしまった。

俺は助かったが、服はボロボロになった状態で河城にとりに回収されてしまい、きゆうり30本で修理、追加きゆうり100本で譲って貰い、今は箆^{たんす}笥の中に仕舞ってある。

二度目は霊夢に男がいるという噂を聞きつけた幽香が博麗神社に行き成り現れた時だ。

俺が博麗神社に居候を始めて二ヶ月位の頃だったはずだ。

霊夢と協力して幽香を戦闘不能にまで追い込み何とか理解を得た。

『力を分け与える程度の能力ねえ。それで？ 霊夢に協力して異変を解決？ それが続いて気付いたらお互いが意識し始めて、男女の仲に……！』

再熱した幽香だった。

が、俺がいる限り、霊夢には無限に近い霊力が供給され続ける。再度、落ち着かせる為に戦いついには、

『っ……。厄介ね。貴方の能力。疲れたわ』

疲労したとは思えなかったが、戦闘後の恒例？ の宴会で誤解は解けた。

どうも、俺の料理が気に入ったらしい。

その後も、花の世話を手伝ったりして幽香さんのご機嫌伺いをした。

『なるほどねえ。ツムグの能力で花に”生命力”や、病気への”抵抗力”を分け与えることで花を管理できるわけね』

フラワーマスターの名の通り。花の世話が好評であった。

花の鑑賞も好きだが、幽香のオパイも好きである。

サイズの上位存在であり、美人であるから見応えは抜群だ。

俺の視線に気付いて、

『？ 別に減るものではないからいいけど。ほどほとにしときなさいよ？』

許可が出たと受け取り、鑑賞は現在も継続中である。

夕食後、四人で茶を啜り、月を見ながらの晩酌はなかなかオツなものである。

美女一人。美少女二人。

幻想郷の女性は美人が多い。

能力持ちの人間、妖怪は全員が美人、美女、可愛い、萌えるの成分を含んでいる。

改めて、思う。美女との晩酌は時間の経過が早い。

数時間前に、霊夢は萃香の酒を飲まされて死んだように眠っている。萃香もからかう相手がいなくなったのと腹が膨れたので寝ると言って霊夢と共に一緒に布団で寝てしまった。

日付が変わろうとする時間だが、幽香と俺は日本酒を飲んでいた。

「ねえ？」

「ん？」

風見幽香は思う。

この人間は変わっている。

戦闘能力はその辺の人間と同じだ。

能力でなんとかしているらしく、多少、強めに殴っても平気であるが、スペルカードを使った所を見たことがなかった。

妖怪に相対する時、人間はスペルカードを使用する。

しかし、ツムグは妖怪に対してスペルカードを使ったことがあるという話は聞かない。

ブン屋曰く、

『貴女が原因でもありませんね。彼に危害を与えると博麗の巫女が報復に来ると、そういう噂です』

卑怯だと若干思うが、アレは負けたのではなく、面倒臭くなった。戦い続けるのも悪くないが、こちらは疲労していくのに対し相手は疲労しない。

更に、消費するはずの力が供給され、永遠に戦えるのだ。それが理

解できたから面倒臭くなった。

ツムグに焦点を置いて攻めれば恐らく勝てるだろう。ソレをしなかったのは、要になるツムグに対して霊夢が何もしていないはずがないと思っただからだ。

後日確かめたらやはり、防護符を持っていた。

ツムグを攻めれば霊夢に隙を与えることになり、こちらが負けてしまう。

霊夢を倒すとなるとコレまた供給があるため、長期戦の末こちらが負けてしまう。

卑怯ね。

一定の能力持ちと組むことで幻想郷で強さのイニシアチブを握れるはずだ。

それをツムグが望まないとしても傀儡として操ってしまえば、無限供給される力を手に入れる事ができるというわけだ。

幻想郷を支配しようとする考える妖怪は殆どいないだろうが、疑問に思ったことがあった。

「幻想郷で勝てない相手はいるの？」

もちろん、ツムグだけなら勝てない相手の方が多い。

「いるよ」

酒が回っているのか随分素直に答えてくれた。

「誰？」

「八雲紫」

なるほど、と思う。彼女は確かに強いのだろう。

萃香の友人である。知り合いであるが戦ったことはない。

相当古い大妖怪である。

「実際、境界を操る程度の能力は何でも有りだよ。力を分け与えるには対象を認識して意図的に分け与えているわけなんだけど、認識の境界をめちゃくちゃにされるか、力を分け与えているラインの境界をいじられるか、俺自身の存在の境界を操られたら終わりだ」

それに、

「生と死の境界を操られたら一瞬で死んじゃうよ」

酒を少し飲み、喉を潤して、

「それを誰にもしないのは紫が幻想郷を愛しているからだと思う。気に入らないからと言って虐げてしまったら全てを受け入れる幻想郷が嘘になる。それは八雲紫のしてきたことを否定してしまう。と考えているのか、ただ面倒臭がりなのか。

掴みどころがないが、それも紫の良い所だと思う。胡散臭い口調の時は照れ隠しだったり、裏にある意図を読ませないための行為だろうね」

「なるほどねえ」

感心する。

なかなか思慮が深いらしい。

やはり、手に入れよう。

「ツムグ、私のモノになりなさい」

「」

驚いた顔も面白い。

正直に思えば、ツムグを気に入っている。

私の【花を操る程度の能力】で秘密にしていることがある。

それは、花や植物の声が聞けることだ。

花達はこちらから話かけるとそれに答えるように声を発するのだ。しかし、花から自発的に声を発することがあった。

『この人、暖かい』

『お礼、助けてくれた』

『命大事にする』

普通の人なら気にも止めない道端の弱っている花にツムグが能力を使い元気にしたり、森で食べれる物を採取している時には多くの動植物に能力で力を分け与えているそうだ。

優しいと言っか、馬鹿だ。

だからこそ、気に入ったのだろう。

霊夢も可愛いが、コイツもなかなか良い所が多い。

手に入れてマイナス面がない。

それどころか、手に入れてしまえば、霊夢がおまけで付いてくるだろう。

退屈することが無くなりそうだ。

「酔ってるな」

「あなたにね」

霊夢と同じ、たまには勘というモノに身を任せてみようと思う。

私の勘はツムグを手に入れば面白い事になると告げている。

ツムグに身を寄せると、彼を、

「そんなに飲んだか？ いつもならこれ位で酔う奴じゃないだろ」

「言っただでしょ？ ツムグは私のモノなのよ？ わかる？ 貴方の

モノは私のモノ。私のモノは私のモノ」

押し倒した。両腕の手首を掴み、馬乗り状態になる。

ツムグは驚いた顔をしている。遅れて抵抗してきたが、力で私に敵うはずもなく、

「悪酔いだな……」

「どうかしらね？ 本当は解ってる癖に」

首筋から舌で擦る^{くすぐ}ように舐め上げて、頬を伝い、唇を奪い、舌を無理やりねじ込む事で口内を蹂躪した。

内心、強姦しているが立場が逆だね。と思う。

一分程蹂躪を楽しむと、股に確かな熱さを感じた。男性が気持ちよくなると硬くなるモノだ。

「んっ、やめっ」

辞めるどころか、もっと激しく舌を動かした。

彼の舌を吸い上げて唇で激しく扱く。

扱きながら舌も使う。

さらに、股にある熱い硬いものを擦るように腰を動かした。

この行為でますます彼の抵抗が強くなったが、両腕はがっちり固定してある。

また馬乗りの要領で腿で彼の腰辺りを挟みバランスよく乗る。

彼の両腕を私は左手一つ抑えつけることにして、開いた右手で彼の服を破り、脱がす。

「
」

何か言いたげだが舌を吸い上げられており、言葉を発することがで

きない。

一方で、私も下着をずらす。

服を脱げないが、月の見える廊下だったので、彼の表情がよく見えた。

レイプは犯罪です。

配点：（警告）

第二章 食事場のジャイアニズム（後書き）

作業BGMは東方JAZZ

第三章 幻想の協力者（前書き）

この小説は東方Projectの二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第三章 幻想の協力者

満月の夜。

神社の長廊下に男女はいる。

男は寝転がっており、その上に跨る格好で女はいた。廊下を軋ませる程の上下運動が繰り返されている。

男女の表情は対照的であった。

男は泣いているような顔で、女は狂気を含んだような笑顔である。女が身体を震わせ、痙攣する。それに合わせるように男も身体を震わせ痙攣した。

幾度も痙攣を繰り返し、果てる。

果ててはまた、女が動き出し、廊下を軋ませる。

それを何回も続け、ついには男女の格好が逆転する。

水気を含む音が響き、また、果てる。

お互いに抱き合い、座った状態で再度動く。

女の足が男の腰に纏わり付く様に絡まり、男の足の上に座った女は満足気に唇を吸う。

着衣していたはずのものはなく、お互いに裸である。

抱き合い、座った状態で互いに痙攣し合う。

身体の一部が繋がったまま、状態を変え、女は犬のように俯せになり、男は激しく腰をぶつける。

今度は水と肉体がぶつかる音が響く。

あらゆる状態でお互いに快樂と、疲れに溺れ最後にはやはり、女が男に跨り、果てることになった。

異変に気付いたのは博麗霊夢であった。
いつもなら朝ご飯の匂いで起きるはずが、異臭で起きた。
アルコール臭だ。

昨晚、いつの間にか寝てしまったと曖昧な記憶を辿る。
布団には酒臭い萃香が寝息を立てていた。

なるほど、原因はコイツか。

しかし、ツムグも寝坊か、珍しいこともあるものだ。

日は昇っており、昼前位だろうか。

布団から起き上がり、顔を洗う。

服を着替えて水を飲む。

ふと、廊下に出た所で、完全に覚醒した。

「何？ これ……」

ツムグの服らしきものがボロボロになって放置されていた。

廊下には服以外のものはなく、清掃されたような痕跡と花の臭いが漂っていた。

幽香も来ていたはずだが、いつの間にか帰ったのだろう。

廊下の清掃は酔って何かこぼしたのだ。

「……。な、訳ないか」

「んー？ どうかしたのかー？」

起きたばかりの萃香だ。

博麗神社に感じる気配は私と萃香以外には無い。

本来いる筈のツムグの気配が無い。

幽香の気配も無い。

これらから導かれる答えは……。

「萃香、事件よ！」

【号外！ 博麗神社の居候、ツムグ氏拐われる?!】

文々。新聞の見出しである。

昨晚ツムグ氏が何者かによって拐われた。

記者こと、射命丸文が昼、博麗神社に訪れた際の、博麗霊夢氏は狼狽していた。（以下、霊夢氏）

詳しく話を聞くと、霊夢氏が目を覚ますとツムグ氏がなくなっていたようだ。

博麗神社の陰の支配者と噂のツムグ氏を誘拐した人物とは一体何者であろうか？

霊夢氏は語る。

昨晚、夕食時には、四人の人物がいた。

一人は霊夢氏、残りは伊吹萃香氏、風見幽香氏、ツムグ氏である。

その内、風見幽香氏とツムグ氏がなくなった。

また、ツムグ氏の衣服と思われるものがあり、その衣服はボロボロに破かれていた。

出血などの痕跡はないが、最後にツムグ氏がいたであろう場所には証拠隠滅の痕跡があり、事件性が高いと思われる。

なお記者は居なくなった風見幽香氏を追うべく風見幽香氏自宅へと向かう。

今後の文々。新聞の真相解明を期待して欲しい。

次号！ 特派員、射命丸文は事件の真相に迫る！

射命丸文は喜んでいた。

無論、事件にあった人物に対してではなく、自分の新聞が好評であったからだ。

紅魔館、永遠亭、香霖堂などで非常に好評であった。

人里にも配っており、上白沢慧音も驚いた様子であった。

まさか、守矢神社が購読してくれるとは思わなかった。

何気に、すごい人脈ですね！。

さて、風見幽香氏の自宅に付いたのだが、誰もいなかった。

「どういうことでしょう？」

とりあえず、写真を撮り、新聞のネタ帳にメモを書き込む。

自宅は昨日から空いている事になる。

帰ってきた痕跡がなく、風見幽香が犯人だとするなら、計画性の高い仕組まれた誘拐かと思ったのだが、突発的に思いついたようだ。

そうなると、ツムグの安否が心配になる。

計画的な誘拐なら命に別状はないだろう。何かの犯行声明なり、要求があるはずだ。

しかし、突発的な出来事だと、最悪、ツムグは食べられているかもしれない。

妖怪の本能に従えばそうなる。

未だに風見幽香からの要求も反応もない。

そこから考えられることは、

- ・ツムグを食べてしまい、まずいと思い、逃げた。
- ・ツムグを食べるために誘拐されたことにしている。

- ・まさかの、駆け落ち。
- ・計画的な犯行を突発的な犯行に見せている。

3つ目はないな。恋愛感情があるとは思えない。少なくともツムグにはないだろう。

可能性が高いのは1つ目。

2つ目は風見幽香自身がいなし、別妖怪が誘拐したと言う発言がない。

4つ目だと事件解決させようとする意図が見える。

となると、裏では妖怪の賢者辺りが動いている可能性がある。

巫女に試練を与える名目で風見幽香と協力しているかもしれない。

「なににせよ。情報が足りませんね」

少なくとも計画性のある犯行なら、自宅の荷物が減っていたり、留守にするための準備があるはずだ。

しかし、それがない。

つまり、急ぎで情報を入手する必要がある。

犯行現場であろう、博麗神社に再度向かう。

「で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそうね。霊夢に試練とでも言えば良いわ」

風見幽香にとって僥倖だったのは、ツムグの人脈の広さであった。

行為の後、朝日が見え始めた時にツムグは気を失うように寝た。

そのまま、睡眠性の臭いを出す花を操り、寝かし続けることにした。

事後の処理として廊下を清掃し、自分は服を着て、証拠をある程度残しつつ、ツムグを抱え博麗神社を撤退した。

自宅で霊夢を迎え撃つのも良いかと思っていた矢先、八雲藍に出会った。

「あの、その全裸はツムグさんですよね？」

「ええ」

口が弓が曲がる様に釣り上がるのを自覚しながら八雲藍を脅して、八雲紫宅に招待させた。

八雲宅に付いた時は片手に八雲藍、もう一方にツムグを抱えた状態だった。

それを見て驚いた橙が八雲紫を叩き起こし、交渉になった。

「藍を人質に交渉ねえ。で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそうね。霊夢に試練とでも言えば良いわ」

「ううう、藍様あ」

「ちえええん！」

うるさいわね。

まあ、人質になるとは思っていないけど。

ツムグを起こして交渉役にしようかしら？

「遅からず、持って3日だけど？」

「それだけあれば十分よ」

ふーん。という言葉とこちらを値踏みするような視線であったが、敵意はなかった。

「童貞は奪われたみたいね。条件はツムグをこちらにも”貸し”なさい」

ツムグも初めてだったのか。

貸す、か。できれば3日の内に墮落させて虜にさせる予定なのだが、八雲紫の能力があれば、色々と楽できそうだな。損得勘定と効率面で見ればお釣りが来るか。

「その位は承認するわ。その代わり」

紫様と風見幽香の顔はまさに妖怪じみていた。取引内容はツムグさんの身体を弄ぶことらしい。

「いい機会だから、藍と橙も経験しとく？」

え？

「あら？ 藍って経験済みじゃない？ 橙も混ぜるなんて、貴女、いい趣味してるわ」

「藍は経験は無いわよ？ 化かして、上手く避けていたもの。橙は、まあおまけみたいなものよ」

決定でなかったものが決定になっている？！
紫様だって経験無いはずです。

「ほら」

と、風見幽香が全裸の、いつもなら霞がかかっているモノが無く、

丸見えな状態のツムグを眼の前に提示された。

「興味津々ね」

決まりね、と言った口調であった。

緊急対策本部は博麗神社になった。

そこには、博麗霊夢、霧雨魔理沙と射命丸文がいた。

「あや？ 紅魔館の人達は既に動いていると？」

「お前が居なくなつて直ぐに動いたぜ？」

「人里は慧音、永遠亭周辺はてあとどんげが動いてるわ。萃香は地下に向かつたわ。早苗達も動いてるみたいよ。ナズーリンがいればよかったんだけどねえ」

霊夢は思った以上にツムグの人脈があつた事に驚いていた。

犯人であろう、幽香の居所は掴めていない。

紫辺りが知つてそうだが、連絡しようにも連絡方法がなかった。

思えば長い付き合いのはずなのだが、八雲紫宅の場所を知らない。

「ま、ツムグだつて身を守る位の事はできるわ」

「そう言つて、握り拳作っているのが可愛らしいですねー」

「アイツ、スペカ下手だからなあ。スペカ下手つて斬新だぜ？ これ、流行らそうかな。お前、スペカ下手だな。みたいに」

そこは、頷いておこう。

スペルカード作るのが下手くそで、結局、自作のは一枚しか持つて

ない。

スperlカードルールができてからのツムグの立ち位置はタンクだからなあ。

「それにしても、幽香は何を考えているのかしら？」

「あやや？ 犯人は幽香さんで決定ですか？」

「勘よ」

「勘ね。話を聞く限り間違いじゃなさそうだが。まず、私は香霖堂で霖之助を締め上げてくるぜ！」

私はどこへ向かうべきか。

魔理沙は飛んでいったが、私の勘では霖之助はハズレだろう。

「で？ 文、何か思う所があるんじゃないの？」

何故か取材後、新聞を最速で配ってまたココに帰ってきたということとは何かつかんだのだろう。

「あやー。あまり、言いたくないのですが、ツムグは食べられたのでは？」

「そんなわけじゃない！」

珍しく、大声を出してしまう。

それに対して文は驚いた様子だった。

しかし、ふうと呼吸をし、

「いや、可能性の問題ですよ。突発的に食べてしまって、まずいと思って隠れている。と私は考えてしまいましたが、それで、現場である神社をもう一度調べて新しい発見が無いかと思いはせ参じたわけでした」

と言い、現場付近を隈なく調べ始めた。
それに協力する形で、私も廊下を中心に調べることにした。

この位の工口なら大丈夫だと思う

視点：作者

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538y/>

境界線上の幻想郷

2011年11月24日12時45分発行